中小企業を活性化し、成功を探求する経営誌

理念と経営

CORPORATE PHILOSOPHY

1

2012 January

巻頭対談 零(ゼロ)からの出発—創造と前進

金融力を強化し、企業力を高め、生産性の向上をはかれ

高崎商科大学 客員教授 片方善治

英誌『エコノミスト』元編集長 ビル・エモット

VS

オンリーワン経営
One and Only Management

株式会社CODコンサルタント
取締役主任研究員
古永 泰夫
text by Yasuo Furunaga

切り口を変えることで、チャンスを掴むことができる

井上陽水の「9・5カラット」をベンチマークして、針のいらない〝光の針〟のレコードプレーヤーを開発し、アナログの「レコード文化」を守った男の夢――

「古材」を「古材」にすることで廃材を資源にできる

新年明けまして、おめでとうございます。初夢はいかがでしたか。二〇一一年はあまりにも厳しく、苦しいことが多すぎました。しかし、年が変わりました。気分一新、ぜひ、いい夢を見たいものです。

昔から、よく「一富士、二鷹、三茄子」といいますが、我が日本の代表である富士山も、今、世界遺産の登録で話題になっています。ぜひ、夢が叶うことを祈りたいものです。

聞くところによれば、第一回目の登録申請ではうまくいかなかったようです。その時は「自然遺産」というアプローチだったようです。富士山といえば「遠見の富士」(強み)、しかし、近場はゴミだらけ(弱み)です。

今度は切り口を変えて再チャレンジ。「霊峰富士」という文化遺産としてのアプローチです。同じ「富士山」でも、見方・切り口を変えることでガラッと変わります。因みに、静岡側と山梨側からもまったく違う景色です。どちらもすばらしい。

さて、切り口を変えることでチャンスを掴むことができる、という事例があります。「古材」という字は何と読むでしょうか。「ふるざい」ですか、「こざい」ですか。木造住宅業界では、昔は「ふるざい」と言って廃材でした。しかし、樹齢三〇〇年の檜の場合、伐採してから一〇〇年目ぐらいがいちばん強度が増す、という研究データがあるようです。

古民家などで、梁や大黒柱などに使われている木材は、大きく強いものがたくさんあります。捨てるにはもったいない。そこに目をつけて、廃材にせず、「こざい」という切り口で再生させた企業があります。京都市伏見区の株式会社丸嘉です。安政六年(1859)に創業して以来、一五〇年にわたって「木」にこだわり続ける古材専門店で、古材の販売・買取を行ない、古材市場を運営しています。

京都には昔から、古いものや伝統を大切にしていく文化があります。一方では、どんどん古いものが壊され、環境問題にもなっているのが現実です。そこで、小畑隆正社長は「捨てられる古材を活かすことが自分たちの使命であり、事業ではないか」と確信します。

小畑社長は自ら、古材施工技術士として現場で目利きを行ない、古い木造住宅を解体し、活かせる古材を見極め、〝古財〟として、丸太・梁・桁・柱・古建具・欄間・銘木板・階段・京町家に再生しています。「ふるざい」が「こざい」に、捨てるものが資源に変わり、日本文化が生まれていくのです。

音楽愛好家の激励に「自分でやろう!」と一大決心した社長

さらに、他の事例も見ていきましょう。文化遺産といえば、「レコード」もう文化遺産です。私も昔はレコー